

# 博士學位論文審査要旨

2013年7月9日

論文題目：モルトマン神学における「神の国」理解

学位申請者：関口 佐和子

審査委員：

主査：神学研究科 教授 水谷 誠

副査：神学研究科 教授 小原 克博

副査：神学研究科 教授 三宅 威仁

要 旨：

本論文は、カール・バルトのキリスト論的集中の影響を受けつつ、終末論の領域でエルンスト・ブロッホなどの視点を導入して新たな「神の国」思想を展開したユルゲン・モルトマンの神学的構想を、初期から後期にいたる4つの時期に分けてそれぞれの時期の著作の分析・解明に取り組むとともにその変遷に通底するこの世への肯定的な姿勢を明らかにすることを試みたものである。まず序章で神学史における「神の国」思想を瞥見し、モルトマンの問題意識を浮き彫りにする。

第一章では、彼の記念碑的著作『希望の神学』成立以前の、戦争とその後の捕虜生活の体験を背景にした時期を扱い、「大地への誠実」というモルトマン神学を貫くこの世界に軸足を置く姿勢が指摘される。第二章では、同世代のゲルハルト・ザウターの終末論理解との異同を通して、哲学と神学を峻別しようとするザウターとは異なるモルトマンのダイナミックに両者を関係づける有り様が示される。

第三章では、『希望の神学』以後およそ10年の間、1960年代からのドイツの学生運動やマルキシズム的無神論が盛り上がりを見せた時期において、「十字架」を肯定的に再把握する中で、「神の国」はこの世の苦難と連帯するというモルトマンの理解を明らかにし、「将来が現在を決定する」というモルトマンに特徴的な世界解釈の視点が紹介される。第四章では、1970年代、虚無的無意味性が社会に拡散していく時期に、この地上の共同体における「神の国」理解を根拠づけるものとして、聖霊論における共同性、そしてそれを經由して三一論の位格の相互交流における交わりをめぐるモルトマンの視点が考察される。

第五章では、展開されてきた「神の国」の此岸性と将来によって規定される有り様について、ヴォルフハルト・パネンベルクとテイヤール・ド・シャルダンとの相違と類似性を指摘し、モルトマン独自の有り様を明らかにしている。この此岸における、イエス・キリストにおいて予め示された「神の国」の具現は、将来からの終末論的規定の中で方向づけられるものであるが、その道筋を世界が歩むところに、世界の再創造が果たされる所以が語られる。

モルトマンにおいて、神の自己啓示たるイエス・キリストの人格に具現された「神の国」は現在の終末論だけでなく、未来的終末論にも適用され、同時にその神学的作業の中心軸を「現在」ではなく、「将来」に置き、「将来」こそが「現在」の方向性を指し示すものであるとして、この「将来」に規定された形で「現在」を見通し、そのことによって此岸の出来事の有り様を定めようとする姿勢が顕著であることを最後に示している。それぞれの具体的現場との関係において「希望」に軸足を置いた神学的な解明を志すモルトマンの視座から、個々の記述の背後に潜む体系的な一貫性とその根拠を提示することは容易ではないが、彼の生涯を継時的に俯瞰する形で彼の

神学の全体に現れた独自性を明らかにした本論文は、博士（神学）（同志社大学）の学位論文として十分な価値を有するものと認められる。

## 総合試験結果の要旨

2013年7月9日

論文題目：モルトマン神学における「神の国」理解

学位申請者：関口 佐和子

審査委員：

主査：神学研究科 教授 水谷 誠

副査：神学研究科 教授 小原 克博

副査：神学研究科 教授 三宅 威仁

要 旨：

関口佐和子氏は、2001年3月、同志社大学大学院神学研究科博士課程の前期課程を修了し、2001年4月、後期課程に入学して研究指導を受け、所定の要件を満たし2010年3月に退学し、このたび学位論文を提出した。2013年7月9日15時より2時間、神学研究科委員会は総合試験を実施し、関口氏から20世紀のプロテスタント組織神学の領域において十分な神学的素養を背景にした的確な応答を受け、また学位請求論文の主題領域について深い認識を有することを確認した。本論文に駆使された文献類を見ても明らかなように、ドイツ語、英語の言語にも高い能力を有している。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

# 博士學位論文要旨

論文題目：モルトマン神学における「神の国」理解  
氏名：関口佐和子

## 要 旨：

本論文は、プロテスタントの組織神学者であるユルゲン・モルトマンの神学における「神の国」理解を探求しようとするものである。モルトマンは自身の神学を、世界における「神の国」と「神の国」における世界に対する「ファンタジー (Phantasie)」であると表現して独自性を示す。モルトマンは神学研究の始めから「神の国」を熟考し、その後も一貫して「神の国」への特別な関心を保ち続けている。「神の国」はモルトマン神学を貫く根本問題と言える。

序章においては、モルトマンと「神の国」思想との出会いについて述べた後、神学史における「神の国」思想を概観する。そして神学史におけるモルトマンの位置を確認した後、問題の所在を明らかにする。

続く第一章においては、『希望の神学』(1964 年)を出版する以前の初期モルトマン神学における「神の国」理解を考察する。神学的背景と時代的背景に触れた後、その時代のモルトマンのラジオ放送原稿を紹介する。その放送の中でモルトマンは、「神の国」への希望がヨーロッパの人びとの精神に刻みつけられてきたことと、その希望の有無が歴史を変えてきたことを主張する。そして「神の国」とは「いのちが生き生きする場所」であることを強調する。次に、『キリストの支配の地平における信仰共同体』というモルトマンの初期の論文を取り上げる。なぜならこの論文にはその後のモルトマン神学におけるほとんどすべての主題が提示されているからである。その論文の中でモルトマンは、カール・バルトのキリスト中心的な「神の国概念」を受け入れ、「神の自己啓示たるイエス・キリストとは人格に具現された神の国である」というバルトの意見を支持する。そしてこのバルトの思想を発展させて、「神の国は死からの復活といのちの国」であるという新たな意見を示す。このような「神の国概念」を背景にしつつモルトマンは、「大地への誠実」という新しい神学的道筋を提示する。これは「神の国」が大地への志向性を持っていることを強く説くブルームハルト父子からの影響であり、ディートリヒ・ボンヘッファーが示した道でもあった。さらにドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャが、子供たちと共に苦しみの多い大地を引き受けた道でもあった。

第二章においては、モルトマンと同時代の神学者であるゲルハルト・ザウターを取り上げる。なぜなら『希望の神学』出版後は、モルトマンに対してさまざまな評価が寄せられたが、その中の一人であるザウターの終末論は、その主張においてモルトマンとの多くの一致が認められ、その類似性は著者たち自身を驚かせたからである。お互いのお互いに対する評価を吟味した後、ザウターの主張に依拠しつつ、モルトマンのプロッホ哲学の受容を考察する。ザウターがモルトマンを批判するのは、プロッホからの大胆な哲学概念の受容である。さらにザウターの黙示思想に対する問いを取り上げ、エルンスト・ケーゼマンの黙示思想を手がかりにして、黙示思想の歴史化について考察する。そしてモルトマンのそれに対する取り組みの妥当性を吟味する。さらにザウターとモルトマンの唱えるエキュメニズムが、普遍的な「神の国」の完成に仕えることに触れる。

第三章においては、『希望の神学』刊行後の10年間に亘って論じられたモルトマンの終末論における二つの重要な主張、「終末論の方向」と「終末論の方法」について考察し、それらがどのように「神の国」と結びついているのかを確認する。方向性においては、「現在の終末論」か「未

来的終末論」か、ということではなく、「現在が将来を決定するのか」それとも「将来が現在を決定するのか」という新しい切り口でモルトマンは終末論を語る。その際に幾人かの神学者たちの意見をモルトマンは批判しているが、それらの批判を概観した後、モルトマンが提唱する「先取り」という方法、そして「超越」という捉え方について考察する。終末論の「方向」と「方法」を明示したモルトマンは、その帰結として「十字架の終末論」に辿り着き、それに基づく将来の「神の国」への希望を説くが、そのことを確認する。

第四章においては、共同体と「神の国」について、終末論、神論、とりわけ聖霊論を中心として教会論からも論じる。先ず「脱出の共同体」という『希望の神学』においてモルトマンが示した内容に迫る際に、「現状否定のアナログア」という子ブルームハルトが示した考え方を援用して考察する。そしてさらに「脱出の共同体」に迫るために、「現在の十字架における薔薇」というモルトマンの論文を読み解く。その際に重要となるのは、「現在の十字架における薔薇」というヘーゲルとルターから得た成句である。そして次に三位一体論から「霊の交わり」を分析する。共同性と自由については、ヨアヒム・フォン・フィオーレの三位一体論に遡り、この思想を引き受けて展開するモルトマンの三位一体的王国論を分析する。またモルトマンは、フリードリヒ・シュライアマハーが聖霊を三位一体的に見ていないとして、彼の「共同精神」という考え方を批判するが、その批判の妥当性を検討する。そして「いのちの共同体」というモルトマンの神学的モチーフを確認する。モルトマンは神学研究の始めから「いのち」の重要性を強調し、「神の国」とは「いのちが生き生きする場所」であることを述べてきたが、聖霊論においても聖霊といのちが天地創造の時から結びついていることを指摘する。この結びつきをモルトマンは「相互内在（ペリコレーシス）」の概念を用いて説明する。このようなモルトマンの神学思想は常に「神の国」と結びついているのでそのことを明らかにする。そしてこの章の最後では、モルトマンが「ひとつの愛のための統一用語」として選んだ「エロース」という表現を取り扱う。モルトマンはアガペー的啓示の次元とエロース的経験の次元の分裂の問題を克服しようとするのであるが、このことによって天の愛と地の愛は結びつけられ、「神の国」は天にも地にも可能になるのである。

第五章においては、モルトマンの後期の著作を中心として、「神の国の到来」という問題の核心に近づく。先ず此岸におけるモルトマンに固有の「神の国」理解を、「神秘的経験」、「汎内神論」、「大地への畏敬」といった三つの特徴的な事柄に分けて考察する。そして次にヴォルフハルト・パネンベルクの著作『神学と神の国』における「神の国の到来」についての思想を考察し、モルトマンの歴史理解と超自然主義的要素の取り入れ方を吟味する。パネンベルクは終末論的「神の国」は歴史の延長線上にあると考えるが、モルトマンは歴史の先の全く新しいところにあると考え、その際に超自然主義的要素を取り入れる、彼の試みを検討する。もう一人モルトマンの「神の国」理解を考察するために取り上げるのはティヤール・ド・シャルダンである。なぜならティヤールの思想には、パネンベルクの思想にも、モルトマンの思想にも類似する点があるからである。ティヤールの「神の国」に関する進化思想を案内し、それに対するモルトマンの批判も取り扱う。そしてモルトマンの宇宙的終末論における「新しい天と新しい地」を明らかにする。続いてモルトマンの宇宙的終末論の象徴である「万物の新創造」について論じる。「神の国」は歴史的終末論における歴史的象徴であったが、歴史におけるイエスの復活の日から「万物の新創造」が始まり、「神の国」と「万物の新創造」の二つは、象徴として同時に存在しているのである。そのイエスの復活の日が「アイオーンの転換点」であるということをモルトマンは述べるが、それが「二つのアイオン」という黙示文学における思想から来ていることを解き明かす。そしてこの章の最後には、冒頭で述べたモルトマンの「ファンタジー」について、モルトマン神学の重要なキーワードである「喜び」と結びつけて考察する。モルトマンは1971年の著作『存在の喜びの神学』において、「喜び」を「すべての人の子供時代の中に照り輝いているもの」と表現する。この表現はブロッホの『希望の原理』の最後に出てくるもので、まだ誰も行ったことのない

い故郷を指し示す表現である。モルトマンによれば、「神の国」はこの表現のような喜びに満ち溢れた国である。モルトマンは、子供のような無垢なるものが「神の国」の恵みを伝えることを説く。そのような「神の国」をモルトマンは、「ファンタジー」でもって美的次元で描くが、そのことに対して肯定的評価を加える。「ファンタジー」という言葉は、シュライアマハーが『宗教論』第二講において肯定的に用いている。シュライアマハーによれば神への信仰は「ファンタジー」の方向に左右され、人が宇宙を直観する時に神を持っているかどうかは、「ファンタジー」の向かう方向によって決まるのである。シュライアマハーは自由の意識に基づく「ファンタジー」であれば神を持ち、悟性に基づく「ファンタジー」であれば世界は持っていないと述べるが、モルトマンの場合は、自由の意識に基づく「ファンタジー」であると言える。

終章においては、モルトマンの「神の国」理解がどのようなものであるかを再確認して、モルトマン神学における「神の国」理解の諸相に近づく。最後に提示するのは「ファンタジー」の向かう先としての「神の国」である。モルトマンのファンタジーによる「神の国」の神学には、人びとを解放する力があり、そのファンタジーは人びとを「神の国」まで導くことができるのであると結論づける。